

無言で食い終った彼は年配者だった。

戦闘に次ぐ戦闘、追尾する敵軍をかわしながら全県という所で終戦となった。それから部隊は復員のため集結地に北上した。

湖南省を八月下旬から幾日歩いたか、敗残の身を、これが大変だった。十月ついに揚子江の馬頭鎮にやつと着いた。南支出發から何千キロなのか、全員相当の疲れである。碌な物を食わず、よくここまで来たものだ。弱い者は途中でバタバタと死んだ。野戦病院も兵站病院もただ患者を一時収容し後送するだけだった。入院してかえって伝染病で死んだ者も無数であった。

## 白耶土湾敵前上陸と広東攻略

福島県 草野 亀 寿

歳月は流れ、早くも五十有余年前、昭和十三年九月半ば、予め覚悟はできていたものの、私にも赤紙が役場の吏員から手渡され、さて行かなくちゃと身震いを

感じた。

妻と何から先に話してよいかわからず、話しもそこに家族のものに留守を頼み、三日目に勇躍征途についた。時に二十三歳。

会津若松二十九連隊に入隊、隊の編成は、福島県下各地から召集された未教育の第一補充兵の人たち、これに班長が歩兵上等兵、分隊長は伍長、隊長は一年志願の少尉など全員三百有余人からなっていました。

九月二十七日、いよいよ屯営出發。沿線各駅の歡呼の聲に送られ、日の丸の旗に包まれ、勝って来るぞという歌声は絶え間なく響き、一路大阪港へと汽車は進んだ。

二十九日、大阪港より船名は忘れましたが、一万トン級といわれる貨物船に乗り込み、夕方の波静かな瀬戸内海へ悠々と出帆しました。どこへ行くのやら絶対秘密。しかし、服装は軽く、これから寒さに向かうという時期に夏衣袴防暑帽に地下足袋携行。船内では多分、南支広東攻略ではないかとの噂が高まってきました。

潮は日一日と黒さを増し、海鳥さえ見えない。この黒潮の太平洋上を今日も突き走る。十二日間の船内での生活でした。十月十一日夜半はピタリと動きが停止し、錨がガラガラ降ろされた。その瞬間、砲声が鳴り響き、空爆が始められた。船内は全部灯火管制で真っ暗闇。ついに乗船十数日にて開戦の火蓋が切つて下ろされた。

十二日払暁、午前五時を期し第一線部隊から次々に後続部隊の上陸準備完了、かの南支白耶土湾塩灶背の砂浜めがけ、本船より小鉄舟に便乗し、湖水のごとく波穏やかな海面を走り敵前上陸を敢行した。陸海空の緊密かつ巧妙な作戦は見事功を奏し、午前五時上陸成功、後続部隊も次々と上陸を敢行した。

南支の朝は夜明けが遅く真つ暗でした。沿岸を固めていた敵も数十発の砲声が暁の闇を破つたのみで、我軍の損害はほとんどなく、敵前上陸は空前の大成功を収めた。

わが部隊も後続部隊として一日遅れて上陸に成功した。わが部隊の任務は、兵站部設営にあつて、先ず船

より糧秣その他、馬糧などすべての軍需品の荷揚げ、さらに荷揚げされた物品を各輜重隊の車、駄馬等に積み込む手伝いを行い、一刻も早く目的地に届けさせる重大責務でありました。日が経つにつれ各戦闘部隊は前進をつづけた。長く砂浜に留まることなく二、三日ぐらいで残務を整理したが、何万とも数え切れない大軍の上陸であるためその物品の散乱も莫大であつた。

白耶土湾上陸に参加した輸送船もまた数知れず、まるで、沖にお椀を浮かせたようでした。如何にこの敵前上陸の規模が大きかったかが何われます。南支の夕方はなかなか暮れ難く、九時になつても明るく、陽光が照つていて暗くならない。そのころ、すでに部隊から二十キロもの奥地の線に進出せるといふ。正に破竹の勢いである。

わずかばかりの携帯口糧で進撃に移り、一部は西進、他の北進した一部は十四日夕には東江河畔までに達したといふ。

一方、海軍陸戦隊も十三日バイアス湾西部の唾鈴湾北岸および排芽山砲台に上陸、これを占領す。十四日

東江の線に達した陸軍各部隊は、広東省の要地惠州城の東方と南方より猛攻、十五日早朝これを占領し、目覚ましい躍進を示し、世界を驚倒せしめた。

我が部隊の進撃に伴い塩灶背は留守となり、残務を整理しバイアス湾より再び乗船し、澳頭港に上陸、ここにて若干の糧秣その他を整理し、十五日トラックに便乗し、一路広東省唯一の大都市惠州へと移動を始めた。しかしその道路は澳頭港より一大軍事道路として淡水、博羅、增城、惠州、広東と通じていた。途中は濛々と吹き上げる黄塵の中、トラックで猛進、時には敵に襲われ、応戦撃退しながら、道路は陥没し、迂回路を取ることがあった。飲料水にも事欠き、車より下りて、井戸水は危ないので近くの砂糖キビを切り、皮をむいてカジリながら行く。しかし行けなくなるとその場に野宿、二日ばかりでようやく惠州に着いた。

着いたのは暗くなってからで、あたりを見回しても誰一人としていない。どこへ逃避したのか。空き家を見付け携帯乾パンで夜食を探り、不審番に立って我が隊を守り、明けて見ると何と死骸は辺り一面に横たわ

っていた。全部支那兵で暑いためか直ぐ悪臭がムンムンと漂っていた。家は皆土足で踏み込まれ、悉く崩壊寸前、空爆の跡などは小池ぐらいの穴となり、家は吹き飛び見る影もない。ことに東江岸沿いには設置されたトーチカに対する攻撃は激しく、その悲惨さ、残酷極まる戦果はたとえようもありませんでした。

惠州という都市について記して見ますと、惠州とは東江という大河が中央に流れ、それを挟んで、手前が惠州、向こうが恵陽の二大都市が並んで、広東省唯一の大都市であります。その大河に橋が架けられず、民舟によつて往来していたに過ぎませんでした。我が隊も明るる日によく東江岸の空き家に宿営を決めました。次の日より我々の任務は澳頭港の船より荷揚げされた軍需品を惠州側の河原に、トラック輸送された荷物を下ろし民舟を使って舟に積み込む。我が隊の半数は川向こうで舟積み、向こう側では舟下ろし。またトラック積みして広東の方に送る。任務には夜も昼もない。看守も時折敵襲にあいました、夜間盗みもやって来るので油断も隙もない激務である。第一線での戦い

ではないが、後方にあつてもやはり戦いでありました。

第一線の戦いを記すと。殊に惠州行きは困難を極めた。東江の河幅三百メートル、濁流が渦を巻いて流れ、おいそれとは渡れない。捕まった敵舟により人は単舟、馬と車は二艘組み合わせた門橋で渡るのである。橋を架けるまではなかなかである。舟を集め、材木を集めて作り、急進を続けて来た軍隊、大砲、車を渡さなければならぬ。工兵隊は架橋に渡舟に汗みどろになって昼夜なく懸命の努力を続けた。上陸の際、輸送船から陸へ波のしぶきを浴びながら鉄舟を操縦している兵隊もそうであつたが、ここで不眠不休で舟を漕ぐ兵隊を見ると、戦場焼けした真つ黒な顔の中に何か神々しいものがある。河を渡すもの不眠不休である。人も馬も汗みどろ。南支の十月はまだまだ暑い。

馬も黙して戦っているのである。炎暑の中を黙々として荷物を満載した車を引つ張つて行く。峠を越えて進んで行く。馬も疲れて躓づき易くなる。重い荷物を自分で背負つて躓づく馬をいたわりながら進んで行く兵隊もある。これが惠州行きであつた。

また、連日の日和に赤土の路面は乾き切つて黄塵濛々として立ち昇る。惠州増城街道は幾つもの丘を越えて行く。低い所は無風地帯で暑い丘の上は砂糖キビの畑がサラサラと音を立てているが、埃がひどいので風下の稲も竹林も埃で真つ白になっている。全くの黄塵の中での進軍であつた。橋はほとんど土をかけてあり、桁だけになって、車が通るだけ板が敷いてある。全部焼く積りであつたらしい。

疾駆また疾駆、広東へ増城攻略。さらに前進を続けた。快速部隊はさらに進撃を続け、わずかに敵影を散見するのみ。広東市街に十里、広東の金城鉄壁を誇るトーチカのある最前線へ対して、わずかに五里内外の距離に迫つた。かくして二十日夕刻、先頭部隊はついに広東東方三里の地点に到達し、二十一日早朝、広東に日章旗が翻り完全に我が手に帰した。

我が部隊は惠州に着いて以来前記の通り激務に追われ、その間に工兵隊による架橋工事業、ある時は我々も手伝い、十一月二十日頃までにその名も「日の本橋」と名付けられて完成した。

今度はこの橋により澳頭港より広東各地に直通可能となった。しかし山積みされた軍需品は容易には整理できず、この残務が済むまで任務が続けられた。ようやく十二月七日、広東へと移動することになった。

惠州市街は、その後宜撫班により一日一日と治安が整い、市民も我が家に戻り、復旧作業に励み始めました。しかし食物は長蛇の列を作り、日本軍による配給であった。本当に敗残という悲惨なものでした。

またもトラック移動、この間は危険個所もなく広東入りでした。着いたところは広東市惠愛路街。一寸出れば中山記念塔の見える場所、直ちに南支派遣軍第二兵站徳久部隊の配下に属し、兵站部を設営、各廠に分かれ配属勤務となる。兵站部とは戦場での一大台所のようなもので、先ず被服廠、糧秣廠、彈薬兵器廠、衛生材料廠、貨物廠などが設営され、さらに兵站宿泊部が並設される。前線よりの通過部隊の宿泊、それに糧秣受領者の宿泊、傷病兵が原隊復帰の際の宿泊、たまに來る内地よりの慰問団の宿泊接待等皆宿泊部の任務である。その後戦況は、広東入城と相俟って九龍港

と広東を結ぶ広九鉄道も皇軍の手によって完全に遮断され、武器輸送は全く閉ざされ、さらに広東より武漢三鎮も間近な陥落作戦となった。従って広東作戦は漢口作戦と策応し敵の最大補給路を遮断し、抗日策謀の根拠を覆滅する企図を以って隠密計画されてきた作戦である。

十月十二日、バイアス湾上陸以來戦史に類例なき戦果を収めて広東を占拠したことは、御稜威によるのももちろんであるが、我が軍の炎熱をおかし、欠乏に堪え、彈薬の補給すら待たず危険を冒して猛進した放胆極まる進撃の結果である。これ我が軍將士の勞苦は筆舌に尽くせぬ難行軍難進撃であった。その間わが部隊は先程の任務に当り、ある兵隊は各廠に勤務、夕方になって作業が終われば我が宿舎へ帰つての休養。衛兵は夜間に耳にする砲生の生々しさが伝わつて來る。

私は何時も糧秣廠の配給係で、受領に來る兵隊さんに伝票通りに渡してやるが、可哀想な兵隊さん、つまり食料の乏しさを訴える者達には隠しても与えてやりました。

明けて昭和十四年一月一日、隊長以下全員で遙拝を行い、休日。慰問の品々や加給品を頂き祝いました。

宣撫班も活躍、治安も維持され、市民も続々と我が家へ戻っており、惠州のように荒らされてはいなかった様子である。壊れた家も修理され、店舗も次々と開き、賑やかさは日一日と増し、平穩の日々が取り戻されるようになってきた。日曜日には午後の外出も許可され、中山記念堂等にも行くことができました。記念堂には射たれた弾の跡が甚だしかった。

一月も早や終わりに近づこうとする矢先、またも一大ニュースが飛び込んで来た。それは何と海南島上陸作戦である。住みなれた広東市と別れることになり、一月三十一日、広東市惠愛路街より長提フランス、イギリス各国の租界地のあつた街より、さらに黄埔港珠江の河口にある港に着き、夕刻「白洋丸」に乗船、出帆、夕闇迫るところ香港沖を通り、遙かに香港の夜景を眺めながら船は突っ走った。船内は十日間豆炒りのごとくゴロンゴロンと左右に揺れ、着いたのは案の定、海南島澄邁湾岸壁であつた。本船は遙か沖合に停泊し、

小鉄舟に乗り移る。何と繩梯子で足もとにようやく小舟が近づいたと思うと離れ、後から次々と兵が下りてくるが中には体ごと海に入る兵もあり、小舟より砂浜に跳ねるのにまた海にザブンである。ようやく上陸に成功。

そこには秀英砲台という威風堂々たる敵の要所があり、敵は急を衝かれ七、八発の砲彈を射つ。その弾も遙か沖合に落ち、我が軍には損害なく、無血の敵前上陸取行となつた。我々は衛生隊の援護に当り、共に海口市に迫つた。前線部隊は早くも海南島唯一の都市海口市を陥入れ、瓊山を占拠し、進撃また進撃たちまちにして全島完全占領した。島民達はあまりにも急を衝かれたただだ茫然として進軍する様を見ている。南の島は早や、田植え盛りもあれば、稲刈り、苗代蒔きもあり様々な光景でした。また田圃には蛙が鳴いている。海口市まで行く途中二晩くらい野宿、たまに砲声も響き、敗残兵による弾も飛んできて中々の抵抗ぶりでした。しかしわが軍に反撃され、我々に死傷者なく、海口市に達することが出来ました。野宿の場合第一に恐

れたのが青蛇という毒蛇と毒のあるサソリでした。

海口市に着いた我々は相も変わらず前記にも申し上げた兵站部の設営任務で海口市街の所々に各廠を設け、分かれて各廠の任務に付く。糧秣廠は海口市海岸に近い元瓊山大学に設立される。広場を占拠しその処に天幕にて覆い、山積みされた糧秣の配給任務に従事することとなり、宿舎は近く海口市竹林村という地所で、駐留することとなりました。

バイアス湾敵前上陸から広東攻略と題した記事も海南島の敵前上陸までのびてしまいました。

## 揚子江遡行

静岡県 鈴木 武

昭和十二年、日本と中国の関係はいよいよ悪化し、七月からはつぎつぎと召集令状が下され、磯辺の静かだった村も鼎の沸く以上に沸き返った。親しかった友達も何人も召されて出征して行った。未教育補充兵で

ある自分にも召集が来て、当然とは覚悟していたものの、十月十二日実際に赤紙を手にした時の心境は実に何ともいい難いものだった。日本男子として、お国のために働く時が来たと奮い立つ気持ちとが入り混じって、胸を突き上げて来た。

何年も苦勞して、ようやく始めた自分の仕事も九月やっただけで整理しなければならぬ。昼間はその仕事の片付けに駆け廻り、夜は夜中までかけて親戚や親しくしてもらった知人、友人のところに、もう再び逢うことのないかもしれぬ別れの挨拶に廻って、十七日に三島野戦重砲兵第三連隊に入隊した。配属された部隊は第二水上輸卒隊古田隊だった。

予防注射等をすませ、行先等もちらん不明のまま列車に乗り込む。それでも三島駅の見送りの人の数は何千というほどだった。発車直前、窓の内と外とで女の人と泣いて別れをおしんでいる人も何人かあった。その中には小さな子供を背負っている人もあった。自分にはこのような見送りはなかったが、家には年老いた祖母と中風気味の父、病弱な母と小学生の弟を残して